

## 租税研究も人間関係も high level forever

高久隆太

商学部 教授

個性豊かな3年生26名、4年生18名が合同で、国際課税を中心に、税務会計学、租税法、財政学等租税に関する学際的研究を行っています。

租税条約、移転価格税制、タックス・

ヘイヴン対策税制等、国際租税法の研究を行い、判例研究、国際的租税回避のケース・スタディを通じた租税回避の実態解明、税制および税務行政のあり方、租税負担額の最小化のための租税戦略等についてさまざまな角度から議論しています。4年生は3年生を指導することが求められているうえ、鋭い質問にさらされることもあり、安穩と

してはられません。ゼミ生の柔軟かつ斬新な発想には、こちらも学ぶことが多々あり、全員で切磋琢磨しています。

ゼミの活動は多彩です。三田祭では、国際課税に関して発表します。自らテーマを選定し、文献やヒアリングによる情報収集、議論に多くの時間を費やしています。また、毎年塾内および塾外のゼミとインゼミを行い、分析力、表現力等の向上に役立っています。さらに、企業訪問、外部の専門家による特別講義、海外からの留学生との交流等も行っています。諸外国の税制を学ぶとともに諸外国の文化にも触れるよ

うにしています。

研究以外の活動においても積極性、協調性を高めることに留意しています。文武両道を目指しており、ゼミ対抗ソフボール、フットサル大会等にも積極的に参加しているほか、合宿でもスポーツの時間を確保しています。ソフボールについては最近予選敗退が続いていることから、かつて全塾大会へ進んだ時の卒業生からは不満の声があがっています。

ゼミ生には、知的好奇心と問題意識を持つこと、ある程度個性的であることを求めています。留学生、帰国子女も歓迎しており、多様性がゼミの活性化に繋がると考えています。資格試験を目指す者には、二兎も三兎も追うよう求めています。進路は、企業、公認会計士、税理士、公務員等さまざまです。卒業後も末長く付き合い合える友人をゼミにて見つけてほしいと願っています。

高久を英訳した“high level forever”を合言葉に、租税研究も人間関係もハイレベルを目指しています。

### ゼミでは何事にも熱く

高嶋笑鈴君 商学部4年

高久ゼミは国際税務を主に研究しているのですが、対象は国際税務にとどまりません。税はあらゆる分野に関係していますので、投資、知的財産等についても取り上げます。

毎年早稲田大学のゼミとインゼミを行っており、昨年は「ファーストリテイリングに投資すべきか否か」というテーマでディベートを行いました。約1カ月間、皆で財務分析を行い、海外戦略について議論するなど準備をし、当日は熱いバトルが繰り広げられました。

普段のゼミでは3年生からも鋭い質問が飛ぶため、4年生も気が抜けません。「金太郎飴になるな」という先生の言葉通り個性豊かなゼミ生たちと共に、勉学に励む日々です。



# 良い免疫、悪い免疫

リウマチ内科―頭から足先まで全身に影響を及ぼす自己免疫疾患に、外来病棟では患者さんと共に闘い、研究室では病態解明に向けて取り組んでいます。

「リウマチ」という言葉の語源は、紀元前400年頃に、医学の祖とされるヒポクラテスが、痛みが全身を流れる病気として「Rheuma(ギリシャ語で「流れの意」)による病気Rheumatismoと名付けたこととされています。その名の通り、リウマチ学は「関節や筋肉が痛む疾患」を扱う学問で、特定の臓器にとどまらない全身性疾患として、関節リウマチ、脊椎関節炎、リウマチ性多発筋痛症、全身性エリテマトーデス、多発性筋炎・皮膚筋炎、強皮症、血管炎症候群、成人ステイロ病、シエーグレン症候群、ベイチェット病などを診断し治療するのが、私たちリウマチ内科です。多くの疾患はしばしば自己免疫を基礎とし、リウマチ・膠原病と総称されます。

人間の免疫システムは、本来ウイルスや細菌など外敵と戦い、自分自身を攻撃しないような精巧な仕組みがあります。この破綻が自己免疫疾患発症を導きますが、その根本的原因は不明です。また、近年治療は著しく進歩しましたが、依然改良の余地があります。

私たちの研究室では病態解明や治療最適化、副作用克服を目指し、精力的に研究に取り組んでいます。関節リウマチにおけるFcγ受容体の役割解明、シエーグレン症候群におけるBAFF/Ng2の解明、DNAマイクロアレイによる新規治療標的分子の探索、生物学的製剤投与下の制御性T細胞の役割、サイトカイン動態の探究、関節リウマチの動脈硬化や骨粗鬆症に対する影響、薬剤有効性予測因子探索など、基礎的検討からトランスレーショナル、臨床研究など幅広い視野で研究を進行しています。

毎年新しい若手医師と大学院生を仲間に加え、教育面ではジャーナルクラブや回診、カンファレンスを通じて学生や医師たちと熱くディスカッションし、診療面では日本最大規模の「免疫統括医療センター」とチーム医療を軸として活動をしています。世界最先端の情報共有し、刺激を与え合い、診療、研究、教育の3本柱の中で、日々邁進する毎日であります。

## 竹内 勤

医学部 教授

リウマチ内科―頭から足先まで全身に影響を及ぼす自己免疫疾患に、外来病棟では患者さんと共に闘い、研究室では病態解明に向けて取り組んでいます。

「リウマチ」という言葉の語源は、紀元前400年頃に、医学の祖とされるヒポクラテスが、痛みが全身を流れる病気として「Rheuma(ギリシャ語で「流れの意」)による病気Rheumatismoと名付けたこととされています。その名の通り、リウマチ学は「関節や筋肉が痛む疾患」を扱う学問で、特定の臓器にとどまらない全身性疾患として、関節リウマチ、脊椎関節炎、リウマチ性多発筋痛症、全身性エリテマトーデス、多発性筋炎・皮膚筋炎、強皮症、血管炎症候群、成人ステイロ病、シエーグレン症候群、ベイチェット病などを診断し治療するのが、私たちリウマチ内科です。多くの疾患はしばしば自己免疫を基礎とし、リウマチ・膠原病と総称されます。

人間の免疫システムは、本来ウイルスや細菌など外敵と戦い、自分自身を攻撃しないような精巧な仕組みがあります。この破綻が自己免疫疾患発症を導きますが、その根本的原因は不明です。また、近年治療は著しく進歩しましたが、依然改良の余地があります。

## 基礎・臨床が一体となって難病克服に取り組む

近藤 泰君 医学研究科博士課程3年

医学部内科学教室・リウマチ研究室では、竹内勤教授・病院長の強力なリーダーシップのもと、多くの医学研究者、大学院生らが協力して研究に取り組んでいます。研究室の雰囲気は明るく、活発な意見交換がなされています。主要な研究テーマとして、関節リウマチおよび免疫難病に対する新規創薬、診断・治療の個別化・最適化を目指す研究を進めています。

私は、関節リウマチ病変部位の微量蛋白質の解析に加え、臨床分野では画像に興味を持ち、超音波を用いた低侵襲診断法の確立を目指して、日々、向上する意欲が湧いてくる環境に刺激を受けながら楽しく研究をしています。

